知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

FEBRUARY 2018 2

60年目の衣浦港

60年目の衣浦港

衣浦港が誕生して、平成29年でちょうど60年を迎えた。
港の企業で働く人には自分の庭のような存在、
しかし、多くの人にとっては「近くて遠い」工業地帯ではないだろうか。
メモリアルイヤーを機に、港の現状を探ってみた。

表紙写真：衣浦港域南端の布土川河口より望む衣浦港　扉写真：国道247号布土交差点付近に建つ衣浦港基標

衣浦港の歴史は武豊港から始まった

この地域に暮らす人であれば、衣浦の名は耳に馴染み深いはずだ。衣浦大橋、衣浦海底トンネル、武豊町立衣浦小学校、そして衣浦港。

衣浦は、古くは「衣ケ浦」と呼ばれ、知多半島東岸と三河西岸に囲まれた深い入り江のことを指す。この名の謂われには二説あり、ひとつは、古代に西三河を支配していた衣君なる人物が由来という話、もうひとつは日本武尊にまつわる話。日本武尊が東征からの帰り、相模沖で暴風雨に遭った。同乗していた弟橘姫が、海神の怒りを鎮めようと海に身を投げた。そのとき着ていた衣が南知多師崎と吉良宮崎に流れ付き、以後、師崎と宮崎を結ぶ線より内側を「衣ケ浦」と呼ぶようになったとか。

この入り江は戦後まで衣ケ浦湾と呼ばれ、国土地理院の地形図にも掲載されていたが、あるとき「ケ」を取って衣を音読みにした「衣浦＝きぬうら」の名前に変わった。変わったと言うより、歴史あるこの入り江が新時代に突入することを記念して「新しい名を与えられた」と言うべきか。それがちょうど六十年前の昭和三十二年（一九五七）。

このとき誕生したのが衣浦港だ。

正確に言うと、衣浦港の範囲が決められ、重要港湾に指定されたのが昭和三十二年五月である。重要港湾というのは、貨物を取り扱う港（漁業利用を含む）について定める「港湾法」で規定された港の種類のひとつ。「国際海上輸送網または国内海上輸送網の拠点となる港湾、その他の国の利害に重大な関係を有する港湾で、政令で定めるもの」と定義されている。難しい文言だが、要するに「海上貨物輸送の拠点として国が重要性を認めた港」ということである。

現在、重要港湾に指定されているのは全国で一〇二港。近隣では三河港や津松阪港も含まれている。ちなみに、名古屋港や四日市港は重要港湾よりワンランク上の「国際拠点港」という位置付け。また、貨物を取り扱わない漁港は「漁港漁場整備法」に基づいて管理されている。

もともと衣ケ浦湾には、知多半島側に武豊港、半田港、亀崎港、三河側に高浜港、新川港、大浜港、平坂港と、比較的小規模な港が点在していた。これらの港は漁船の出入りもあったが、古くから酒、酢、味醂、木綿、塩といった特産品の積み出し港として栄えてきた。

この中で特異な存在だったのが武豊港だ。水深の浅い衣ケ浦湾は当時、湾口に近い武豊付近までしか大型船が入航できなかったため、明治に入ると大型船の寄港地として脚光を浴びるようになった。以後、海上輸送された東海道本線の建設資材を運搬するために武豊線が敷設され、愛知県で実施された陸軍大演習で明治天皇の上陸地になり、明治三十二年（一八九九）には武豊港が開港場（貿易港）に指定される。開港場として指定された範囲は、武豊ピンポイントではなく衣ケ浦湾全域であり、公的には「衣ケ浦湾＝武豊港」と認識されていた。つまり武豊港こそが衣ケ浦湾の「顔」だったのだ。

衣浦港の誕生とともに武豊は工業都市に

明治から昭和にかけて武豊港を中心に発展していた衣ケ浦湾は、昭和に入り日本が戦争へと突き進むころ、重要性が注目されるようになる。昭和十二年の日中戦争以後、工業製品の生産力増強が叫ばれるなかで、新しい臨海工場地帯として白羽の矢が立ったのだ。そこで昭和十五年、内務省により衣ケ浦湾の大規模な修築が企図された。これは、現在とほぼ同じ規模の埋め立てを行い、工業用地を造成しようという計画だった。半田市は、この計画をもとに企業誘致を行い、成岩地先に日本碍子（現日本ガイシ）と川崎製鉄（現JFEスチール）が、乙川・半田地先に中島飛行機（現輸送機工業）が工場を設置した。しかし、太平洋戦争により衣ケ浦湾修築計画はいったん頓挫する。

計画が再浮上するのは、戦後の復興期から高度成長期へと移行する頃。昭和二十八年に沿岸の自治体を中心に「衣ケ浦湾工業地帯建設期成同盟会」が結成されて機運が盛り上がり、昭和三十二年、晴れて武豊港ほか六港が統合されて衣浦港となり、重要港湾に指定された。翌年には衣浦港の管理者である愛知県が臨海工業地帯の造成計画を策定し、さっそく埋め立てが始まった。

工事の口火が切られたのは武豊町である。最初に工事が行われたのは昭和三十四年の沢田新田。翌年以降、3号地地区（現在の字一号地から字旭）、5号地地区、7号地地区、1号地地区（現在の字竜宮）…と工事が進められていく。衣浦港における最初期の埋め立て工事はすべて武豊町の地先で、武豊町以外で始まるのは昭和三十九年以降になる。また、造成を開始した年に伊勢湾台風の襲来で甚大な被害を受けたことか

昭和40年代の川崎製鉄知多製造所の全景。中央の海に突き出た部分は9号地地区で、まだ埋め立て工事が進行中。その南は埋め立てが完了して製品などの置き場になっている7号地地区。右端は沢田新田で、木材が山積みされているのが見える。（写真提供：JFEスチール株式会社）

衣浦港全体図

国土地理院の電子地形図25000「刈谷」「半田」「河和」を使用

JFEスチール（株）知多製造所

昭和18年/1943操業開始（当初は川崎重工業、のちに川崎製鉄）。昭和38年/1963に7号地、昭和42年/1967に9号地へ敷地拡充。シームレス鋼管、電縫鋼管などを製造

東海カーボン（株）知多工場

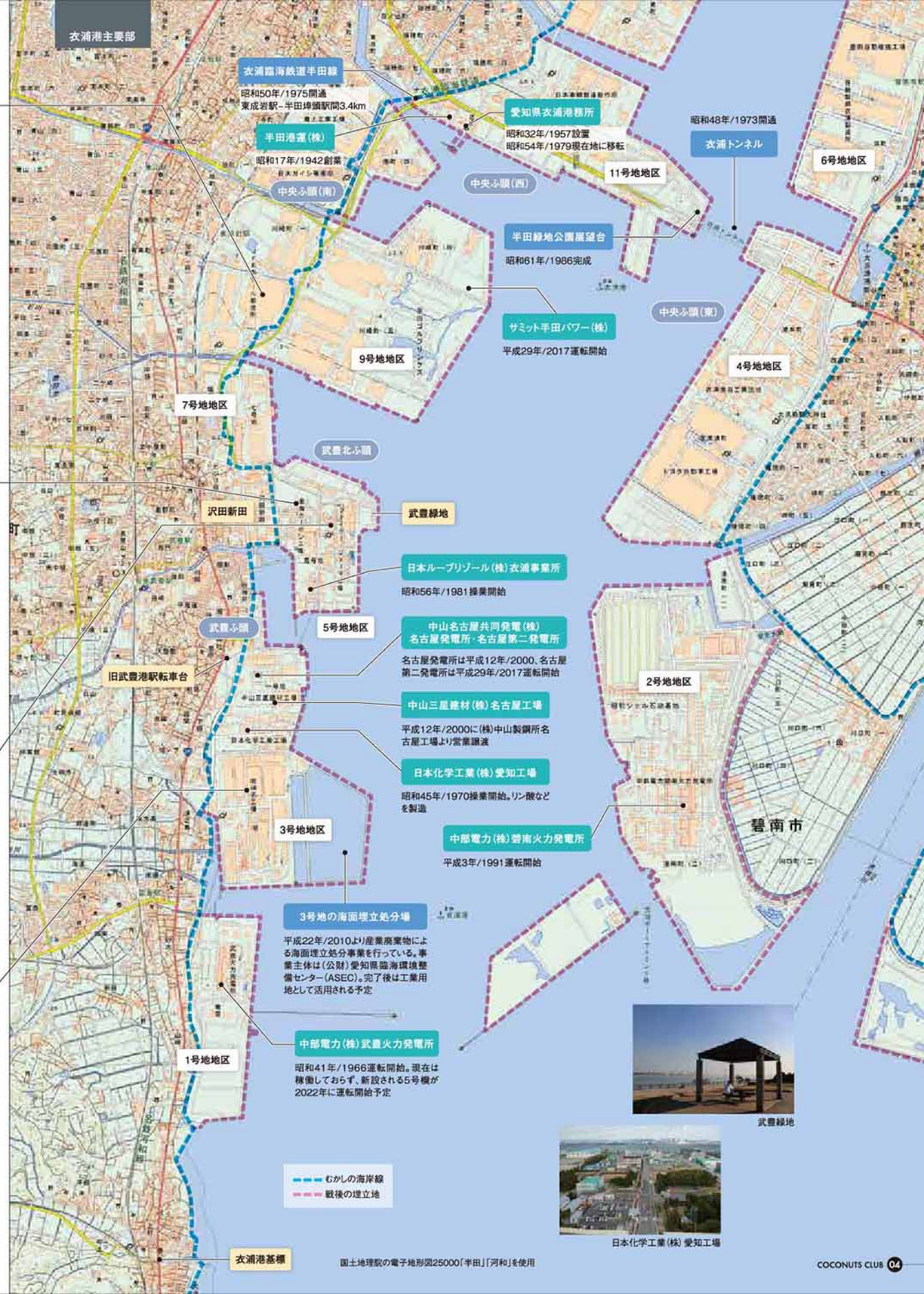
昭和37年/1962操業開始（当初は東海電極製造）。カーボンブラックを製造

ファイザー・ファーマ（株）名古屋工場

昭和42年/1967操業開始（当初は台糖ファイザー）。医薬品を製造

AGC旭硝子 愛知工場

昭和45年/1970操業開始。自動車用ガラスを製造。素板の板ガラスから最終製品の自動車用安全ガラスまで工場内で一貫生産する



武豊緑地

日本化学工業（株）愛知工場

国土地理院の電子地形図25000「半田」「河和」を使用

ら、高潮対策を講じた防波堤の整備も同時に進められた。

そうして出現した広大な用地に先陣を切って進出したのは中山製鋼所である。関西に拠点を置く鉄鋼メーカー大手で、昭和三十五年、3号地地区(字一号地)で「名古屋製鋼所」の操業を開始。以後、数年のうちに川崎製鉄、東海電極製造、中部電力、台糖ファイザー、日本化学、旭硝子といった大企業が進出した。また、中小の企業の進出や地元企業の移転も進み、農村地帯だった武豊は瞬く間に工業の町へと変貌していったのだった。

愛知県のものづくりを下支えする拠点港

さて、現在の衣浦港はどのような港なのだろうか。

衣浦港のエリアは、南は美浜町布土に建つ「衣浦港基標」と西尾市一色町細川を結ぶライン、北は東浦町石浜と刈谷市衣崎町の地先までと、なかなか広い。関係する自治体は八市町にまたがる。立地する工場も多く、前述した企業以外ではアイシン精機(半田市)、豊田自動織機(半田市・碧南市)、日本車輌製造(半田市)、トヨタ自動車(碧南市)、マツダ(碧南市)といった錚々たる大企業が名を連ねる。さらに湾口部には、中部電力の武豊火力発電所と碧南火力発電所もある。

そんな衣浦港の特徴を一言でいうと、ずばり「バルク貨物」の輸入量が多いことだ。

バルク貨物とは、包装せずに粉粒体のまま輸送されるもののことで「ばら貨物」とも呼ばれる。石炭、穀物、木材チップといった原料や燃料などで、それらを外国から輸入する窓口の役割を衣浦港が担っているのだ。衣浦港の総取扱貨物のうち七十パーセント近くをバルク貨物の輸入が占めている。その中で最も多いのは輸入品の四分の三を占める石炭で、これは火力発電所で使われている。石炭に次いで多いのは飼料やコーンスターチとして使われるとうもろこし。この取扱量は全国の港で第一位だ。

輸入に比べると移出・輸出の割合は少ないが、沿岸とその背後に日本屈指のものづくり地域が広がっており、愛知県で製造された工業製品の積み出し港としても機能している。西に名古屋港、東に三河港があり、愛知県の産業はこの三港が機能的に補完しあうことで成り立っているとも言えよう。

衣浦港の大工場では何が作られているか

衣浦港には実にさまざまな企業がある。しかし、社名こそ知っていても、その工場で何が作られているかよく知らないという人も多いのではないだろうか。今回の取材で、武豊町にあるいくつかの工場で話を聞くことができたので、紹介してみよう。

3号地地区(字一号地)にある日本化学工業株式会社愛知工場。昭和四十五年に操業を開始した同工場では「黄リン」を出発原料に、主に「リン酸」という液体化学物質を製造している。リン酸は半導体などの電子材料や金属表面処理剤などの工業薬品原料として使われるほか、食品添加物に使用されるなど数多くの分野で広く使用される。また同社では自社で製造したリン酸を原料とする「リン酸塩」も各種製造しているが、リン酸塩もまた食品添加物や医薬品などの多くの産業で利用されているそうだ。

リン酸やリン酸塩は日常生活で目にすることはない化学製品だが、その用途は幅広く、現代社会になくてはならない存在だ。

ちなみに国内のリン酸メーカーは数社あり、日本化学工業はその中のトップメーカーである。

5号地地区にある東海カーボン株式会社知多工場。社名のカーボンとは炭素のことで、大正七年に創業した炭素製品メーカーの草分け。知多工場の操業開始は昭和三十七年で、当時の社名は東海電極製造株式会社だったが、昭和五十年に現社名に変更している。この工場で作られているのは「カーボンブラック」。これは、原料のオイルを熱分解するなどして非常にこまかい顆粒状にした、純度の高い炭素である。カーボンブラックは、タイヤ、チューブ、ベルト、ホースなどゴム製品の補強材として使われ、同社製の約七十六パーセントは自動車タイヤ用とか。簡単に言うと、自動車タイヤはゴム六〜七割とカーボンブラック三〜四割を練り合わせて作られる。

国内のカーボンブラックメーカーは全国に五社。この中で約三割の生産量を東海カーボンが占めている。愛知県の自動車産業は、このような企業の存在もあって成り立っているのだ。このほか、インクジェットプリンターの黒色顔料としても使われており、今後も他分野に用途が広がる可能性を秘めている。

7号地地区と9号地地区にまたがり、市町境を越えた広大な敷地を有するJFEスチール知多製造所。粗鋼生産では日本で二位、世界でも五指に入るという世界的な企業である。知多製造所の従業員は七百人、協力会社の社員も含めると場内で二千八百人もの人が働いている。

そのルーツは、明治十一年に川崎正蔵が東京に設立した「川崎築地造船所」。この会社はのちに川崎重工業となり、戦後間もない昭和二十五年、製鉄部門を分離して川崎製鉄が発足。半田の知多工場は川崎重工業時代の昭和十八年から操業していたが、昭和三十八年に7号地地区、昭和四十二年に9号地地区を取得し規模を大幅に拡大した。そして平成十五年に日本鋼管と合併してJFEスチールとなり、現在に至っている。

知多製造所の主力製品は「シームレス鋼管」と「電縫鋼管」である。どちらもパイプなのだが、シームレス鋼管は棒状の鋼材(ビレット)から作られる継ぎ目のないパイプ、電縫鋼管はロール状になった鋼板(ステンレスコイル、ホットコイル)から作られる継ぎ目のあるパイプ。前者は原油を採掘する油井、あるいは原油や天然ガスなどのパイプラインに、後者がそれらのパイプ外壁保護などに使われる。なんともスケールの大きな用途だ。このほか、自動車用の鋼管、建築

「ものづくり王国愛知」を、この港が支えている。

中央ふ頭西地区より望む衣浦港

未来を見据え、港も企業も船も進化を続けている。

用の角パイプなども生産している。

バイオマス発電を支える デビュー間もない新造船

中部電力の武豊火力発電所に聳え立っていた高い煙突が、この一月に撤去される。ここではこれから、二〇二二年三月の運転開始を目指して5号機の建設工事が始まることになっている。5号機では従来の石炭発電による環境への影響を省み、二酸化炭素の排出量を削減すべく石炭に木質バイオマス燃料（木質ペレット）を混焼することが決定している。

武豊町にはもうひとつ、3号地地区（字一号地）にある中山名古屋共同発電株式会社の名古屋発電所がある。ここは、中部電力に電力を卸供給する石炭火力発電所として平成十二年に運用を開始した施設。平成二十五年に改修されてバイオマス混焼発電ができる設備になり、さらに昨年九月には名古屋第二発電所も新設された。このほか、9号地地区（半田市川崎町）にもサミット半田パワー株式会社のバイオマス発電所が昨年六月から稼働。衣浦港はいま、バイオマス発電の集積地になりつつある。

そのバイオマス発電に使われる木質ペレットは、衣浦港が〝専門〟とするバルク貨物の一種である。海外から海上輸送されてきたそれは中央ふ頭にいったん陸揚げされたのち、必要分だけ発電所に移送される。置き場から発電所への移送を担っているのは、11号地地区に本社を置く半田港運株式会社。昭和十七年、衣ヶ浦湾の各港にあった小規模の海運業者を統合して設立された海運会社である。

これまでに半田港運が主に請け負ってきたのは、大型船で運ばれた石炭や穀物の陸揚げ、バルク貨物や製品の陸揚げ・積み込み・保管などといった荷役業務。また、衣浦港内の輸送や伊勢湾・三河湾内の輸送の手配・管理を、このエリアの船舶所有者らで組織した「衣浦三河船舶協業組合」と提携して行っている。そんなわけで長らく自社船を所有していなかったのだが、バイオマス発電の需要が増えてきたのを受け、平成二十八年、木質ペレットを運ぶための自社船「衣浦1号・2号」と「こううん」を就航させた。デビューからまだ日は浅いが、大小さまざまな船が行き交う衣浦港で存在を放っている。

取材協力◎愛知県半田港務所／JFEスチール株式会社／日本化学工業株式会社／東海カーボン株式会社／半田港運株式会社／AGC旭硝子／ファイザー・ファーマ株式会社／株式会社ガスアンドパワー／中部電力株式会社

参考文献◎衣浦港五十年の歩み（衣浦港重要港湾指定50周年記念事業実行委員会）／衣浦港十年の歩み（愛知県土木部港湾課）／古くて新しい港 衣浦物語（衣浦港振興会）／武豊町誌／中部圏研究VOL.198所収「中部の港湾探訪」第12回（公益財団法人中部圏社会経済研究所）／衣浦港要覧2017（愛知県）

衣浦港運の「衣浦1号・2号」は赤青のツートンカラーと平たい船体が目印